

中之島・天満天神エリアの ビジョンを語る



大川より中之島剣先を望む



中之島アイランド・ミーティング <報告>

2017年3月6日／大阪天満宮会館
主催：一般社団法人 おしてるなにわ(平成 OSAKA 天の川伝説の実施団体)
公益財団法人 関西・大阪21世紀協会



司会進行
佐々木洋三
関西・大阪21世紀協会
専務理事

賑わい創出と魅力発信に向けた新たな議論を

関西・大阪21世紀協会は、第3次グランドデザイン(2003年3月)の中で「水の都・大阪の再生」ビジョンを提唱し、以後、経済界・大阪府・大阪市の合意のもと親水環境の整備が進められました。これに触発され、安藤忠雄氏が「市民や企業の寄付で世界に名だたる桜並木をつくろう」と呼びかけた「桜の会・平成の通り抜けプロジェクト(2004～07年)」には4億円を超える募金が集まりました。さらに民間人の知恵と工夫で大川の川面に光の天の川を描く「平成 OSAKA 天の川伝説(2009年～)」も誕生しました。この10年でこれほどビフォー・アフターがはっきりした取り組みは他に例を見ません。

このように、都市には皆が共有できる夢やビジョンが必要です。そこで、中之島・天満天神エリアのさらなる賑わいの創出や魅力発信について新たな議論を巻き起こすべく、将来の夢やビジョンを考えるシンポジウムを企画し、各界有識者の方々にご意見を伺いました。

面白かった中之島の時代

基調講演 高島幸次氏

大阪大学招聘教授
大阪天満宮文化研究所研究員



朝廷文化とつながり

中之島は、仁徳天皇の時代に開削された大川(難波くになわ)の堀江に、上流からの土砂が堆積してできた、いわば人工の川から自然に生まれた中洲です。万葉集には「押し照る難波堀江の葦辺には 雁寝たるかも 霜の降らくに」という歌があり、「おしてる」は難波の枕詞で「水面が光る」という意味があります。本日の主催者の名前は、それに由来しています。また、当地では850年から1224年の間、即位された天皇が国を治める力を得る重要な神事「八十島祭(やそしままつり)」が行われました。夏の風物詩となった「平成 OSAKA 天の川伝説」は、そうした日本の国の成り立ちを背景にしたイベントなのです。

開発の遅れが発展の契機に

豊臣秀吉は、大坂城の城下町を上町台地に沿って四天王寺から住吉大社へと南北に伸ばそうと計画しました。西方面は水辺に近く、低湿地だったからです。ところが、慶長元(1596)年の慶長大地震で人家や寺院などが壊滅的な被害を受け、南北構想が東西構想に変更されました。こうして「船場」が開発されましたが、中之島は構想外で、長らく手付かずのままでした。

その後、慶長19(1614)年の大坂冬の陣で、豊臣方が中之島の「五分一(ごぶいち)」という所に砦を構えて徳川勢の侵入に備えましたが、11月30日に陥落。これが歴史上に中之島が記録に残った最初で、私は11月30日を「中之島の日」にしてはどうかと提案しています。ちなみに五分一とは税率20%のことで、当時、中之島では農業が行われていたと思われます。

開発が遅れた中之島には人家が少なく、各藩が蔵屋敷を置くには好適地でした。船による物資の搬出入にも都合で、江戸時代には島内に41藩、堂島川や土佐堀川、江戸堀川沿いに49藩、合計90藩の蔵屋敷が立ち並び、日本経済の中心地として栄えました。ところが明治4(1871)年の廃藩置県で、中之島の蔵屋敷は消滅。明治政府は、広大な跡地に官公庁や大企業の本社を置けばよいと考え、現在の中之

島の形態ができました。石見浜田藩の蔵屋敷跡地に大阪市中央公会堂が建ち、肥前唐津藩の蔵屋敷跡地には大阪市庁舎、備前島原藩の蔵屋敷跡地には日本銀行が建ちました。

日々の娯楽だった船遊び

上方落語の古典『船弁慶』には、難波橋の上流で川に落ちたが水深は膝までしかなかったというくだりがあります。当時、中之島の東端は難波橋の下流辺りにあり、その上流は浅瀬になっていました。明治期には島の東端は難波橋にまで達し、浅瀬も砂洲になった様子が描かれています。

また、喜六と清八が難波橋へ夕涼みに出かける『遊山船』には、橋の上やたもとには冷やした西瓜などを売る夜店が並び、川面の遊山船(船遊びの屋形船)ではお金持ちが芸妓遊びの音曲を響かせ、飲食物や芸を売る多くの小舟が並走しているという描写が出てきます。高安月郊『水の都・畿内見物(1912年)』にも、「鮎卵、芝藤、日出などの舟生洲(ふないけす)へつけて料理をあつらえ、舟へ運び入れて更に遊」とあります。鮎卵や芝藤は料亭で、お金持ちの船では、多くの食材を積み込み、料理人もいて料亭と同じような料理を出しました。一方、一般庶民の船遊びは、網で魚を獲って調理するため、不漁のときはお腹がすいたまま帰ります。

明治時代の写真も残っており、「ばらぞの橋」や難波橋には貸しボート屋があり、多くの人が川面に出て夕涼みを楽しんでいたことが分かります。現代においても、一日だけのイベントではなく、日々中之島の水辺を楽しみ、生活の中に川が活かされることが重要だと思っています。

(高島幸次氏：1949年大阪生まれ。専門は日本近代史。平成24年度大阪市民表彰〈文化功労〉。著書『大阪天満宮史の研究』他)



貸しボートで夕涼みを楽しむ人たち(戦前の大川風景)
(画像提供：高島幸次氏)

明治17～23(1884～90)年の中之島(参謀本部陸軍部測量局・2万分の1仮製地形図)(高島幸次氏提供)



水都大阪 中之島や天満天神地区の夢・ビジョンを考える



寺井種伯氏
大阪天満宮 宮司



楠見晴重氏
関西大学 前学長



藤尾政弘氏
株式会社フジオフードシステム
代表取締役社長



原野芳弘氏
株式会社ランドマーク・
ジャパン 代表取締役



村西利恵氏
関西テレビ放送株式会社
アナウンサー

司会進行 佐々木洋三(関西・大阪21世紀協会 専務理事)

中之島・天満天神エリアとの関わり

佐々木 中之島・天満天神エリアにおいては、これまで市民や企業が主体となって「桜の会・平成の通り抜けプロジェクト」や「平成 OSAKA 天の川伝説」などの地域活性化に取り組んできました。そうした中であって大阪府・市は都構想を推進してきましたが、「都」というのは器であり、今後何をすべきかという中身があまり議論されてこなかったように思います。親水整備でいえば、道頓堀は遊歩道が整備され、観光客で賑わっていますが、中之島エリアは水辺の景観こそ向上すれ、賑わいの創出や水の都の情報発信という観点ではまだ道半ばといえます。そこで、中之島・天満天神地区について新たな議論を巻き起こそうと、この「中之島アイランド・ミーティング」を企画しました。まずは、「平成 OSAKA 天の川伝説」の生みの親、原野さんから中之島・天満天神エリアとの関わりについて伺いたします。

原野 私は、スポーツイベントやライトアップ、水辺でのイベントなどを通じて景観を表現し、その魅力を伝える仕事をしています。私が中之島・天満天神エリアと関わったのは、大阪城公園で行われた毎日放送主催のイベント「オーサカキ

ング(2004年)」が最初です。その後、「OSAKA 光のルネサンス(2006年)」や大阪城西の丸庭園での「大阪フィルハーモニー交響楽団野外コンサート(2007年)」、「京阪電鉄・中之島新線の開通開業記念事業(2008年)」、剣先公園での「ビーチバレー・ワールドツアー日本大会(2009年)」と続き、2009年から「平成 OSAKA 天の川伝説」に参画させていただいています。この10年間、大阪城や中之島、大川の景観にとっても惹かれてこまできました。今後も中之島の面白い水辺景観づくりに取り組んでいきたいと思っています。

藤尾 私の実家は、日本一長い商店街の「天神橋筋商店街」で食堂を営んでいました。小学3年生のときに病気で耳を悪くして聞こえにくくなったとき、私は天満宮に行って砂の上に絵や文字を書いては消すことを繰り返して遊んでいました。そして最後にはきちんと消して、神様に手を合わせて帰ったものです。天満で生まれ、天満で育った私にとって、天神橋筋商店街や天満宮は今でも大切な心の拠り所となっています。

村西 私は天満宮に一番近いテレビ局の関西テレビに勤務しています。天満宮の近くには番組を制作するプロダクションがいくつかあり、そこへ行った帰りには必ず天満宮にお参りをします。中之島の芝生の上で「リバーサイドヨガ」と



OSAKA 光のルネサンス」
(原野芳弘氏提供)



大阪天満宮(2017年7月)



大阪フィルハーモニー交響楽団野外コンサート」(原野芳弘氏提供)



中之島公園での朝ヨガ、風景
(村西利恵氏提供)

いう朝ヨガ、をしてから出勤することもあります。天気の良い日は、川の風を感じるととても気持ちがいいですよ。スーツ姿の男性もおられます。自

転車でやってきて芝生の上でヨガウェアに着替え、終わるとまたスーツに着替えて出勤されています。このあたりはビジネス街なので休日やゴールデンウィークになると空いており、中之島の芝生公園に友だちと集まってピクニックなどを楽しんでいます。大都会の中であって、川や緑の自然を感じられる中之島は、つい行きたくところですよ。

楠見 私は関西大学の学長を7年間務め、昨年9月に任期満了で退任しました。関西大学は明治19(1886)年に大阪・京町堀で法律学校としてスタートし、昭和4(1929)年に夜間部の天六学舎がスタートしました。働きながら学ぶ学生が多く、法曹界で活躍する卒業生を多く輩出しました。通学路の天六商店街界隈は、安くておいしいものが食べられるとあって、学生たちにはとてもありがたい所でした。関西大学にとって、中之島・天満天神エリアとりわけ天神橋筋商店街はなじみ深いところなのです。残念ながら1994年に夜間部は閉鎖され、創立130年を機に天六学舎跡地を売却して梅田に新キャンパスを開きました。新キャンパスもかつての天六学舎のように、社会人を育てる機能を備えています。

かつての関西大学・天六学舎(楠見晴重氏提供)



魅力と歴史的レガシー

佐々木 高島先生の基調講演では、かつて中之島に貸しボートを浮かべて夕涼みをしたことや、落語に登場する中之島の風景などが紹介されました。皆さんは、中之島・天満天神エリアの魅力や歴史的レガシーをどのように感じておられますか。

寺井 西暦313年に仁徳天皇が「難波の堀江(現在の大川)」を拓き、灌漑事業を進められました。当時、現在のNHK大阪放送局のあたりに「高津宮(たかつのみや)」という皇居がありました。今から1600年以上前に、大阪に都があったのです。また、日本書紀には、仁徳天皇の父にあたる応神天皇の時代に「大隅宮(おおすみのみや)」が出てまいりますし、その約300年後の645年には、孝徳天皇が「難波長柄豊碓宮(なにわのながらのとよさきのみや)」をお定めになりました。奈良(平城京：710年)や京都(平安京：794年)よりはるか昔、大阪は日本の中心地だったのです。大阪に皇居がおかれたのは、唐や隋といった海外との交流に適した場所であったことなど、さまざまな条件があったと思いますが、そういう時代を経て今日の大阪が築かれてきたのです。私は、大阪が日本最古の都だった歴史的事実を多くの人たちに知っていただき、大阪を思う気持ちをもっと持っていただきたいと考えています。

藤尾 子どもの頃の話ですが、朝、近所の人に会うと、きちんと挨拶をしなくては大人たちに叱られました。小学校から帰ると、実家の隣の散髪さんが声をかけてくれ、ただで髪を刈っ

通学路の天六商店街(昭和40年代)(楠見晴重氏提供)





後期難波宮の基壇跡と難波宮跡公園(大阪市中央区)。孝徳天皇がここで大化改新を行った。

てくれました。とはいえお客さんが来ると、半分刈って終わりということもありましたが(笑)…。商店街の角々には椅子が置いてあり、お年寄りが休憩できるようにしてありました。天神橋筋商店街は、そのように人に優しく、まち全体で子供を躱げ、育てる気風のあるところでした。

また、ここでは調理道具から調理服まで、食べ物のことなら何でも揃いました。私の実家の食堂では、料理を作る音や匂いもお客様に味わっていただこうと、厨房と客席の間にあまり壁を設けませんでした。7月になると天満界限は天神祭ムード一色になります。私は、父が切った西瓜を店頭に並べる手伝いをするのですが、西瓜の大きさがバラバラなので「大きさが違う」というと、父は「祭りやからええんや」と意に介しません。現在、私は多くの仲間と一緒に仕事をし、多くの店を出させていただくようになりましたが、その原点は天満天神にあり、当地の空気感も商品として全国に出していきたいと思っています。

佐々木 寺井さんは日本最古の都市としての大阪のプライドを、藤尾さんは天満天神のソフトパワーについてお話しされました。原野さんはいかがですか。

原野 天満橋に近い八軒家浜は、かつては熊野古道につながる水陸の結節点でした。大川と中之島・天満天神エリアを結ぶ水路ネットワークや、琵琶湖・淀川水系の拠点としても機能しました。こうした由緒ある八軒家浜で、現代に合った形で往時の賑わいを取り戻そうと、2009年に複数の企業と共同で「川の駅はちけんや」という情報発信基地をオーブ

ンしました。2011年からは「にぎわいXing(クロッシング)」と名付け、さまざまな交流イベントや情報発信を行っています。オープン後1年間の利用者は16万9,000人でしたが、2015年には年間40万人を超えました。大規模な商業施設のようにはいきませんが、「平成OSAKA 天の川伝説」をはじめ、花市や浜市、ヨガ、ウォーキングなど、さまざまな団体にご利用いただいています。

現在、天満橋は、船着場、川の駅、京阪電車、地下鉄などの結節点であり、水陸のアクセスをもっと活用してエリアの活性化を図ることが必要だと考

えます。例えば、現代版の熊野詣を再現するのも面白いと思います。また、川も遊覧船などが浮かんでいてこそ楽しく見えます。そうした水辺のアクティビティを増やし、多様な水辺景観を開発していきたいと思っています。

佐々木 北前船や三十石船に代表される海や川の交通、そして日本最古の都市としてふさわしい魅力がある場所だからこそ多くの人が集まり、その景観は磨けばもっと光るといったのが原野さんの持論ですね。村西さんはいかがでしょう。

村西 私が日々感じている中之島・天満天神エリアの魅力は、藤尾さんがおっしゃったように、食べ物に関するものが何でも揃うことです。私は釣りが趣味で、佐々木洋三さんが師匠、釣行記や釣った魚をどう料理するかをスポーツ新聞に掲載しています。魚を料理するための包丁や焼き網などの道具は、全て天神橋筋商店街で買い揃えています。また、昼食を食べに行くお店では、「釣った魚を持って来たら料理してあげよう」と言っていただきます。

このエリアには、さまざまなお店があるのも魅力です。JR天満駅近くの「せんべろ(1,000円でペロペロになれる居酒屋)」から、中之島の川沿いのお洒落なレストラン、大正ロマン漂うビルのレストランなど、仕事仲間とワイワイできる庶民的な居酒屋から、ちょっと気取って行くお店まで、幅広い選択肢があります。

楠見 私の専門(都市システム工学)でいえば、中之島には大阪市中央公会堂や日本銀行大阪支店、フェスティバル

ホールなどの文化施設、企業の本社など、コンパクトなエリアにさまざまな機能が集積しているのが魅力だと思います。人口が減少に向かうなか、都市を魅力的にしていくためには都市機能の集約や空間の有効活用は重要課題で、「スマート・コンパクトシティ」が世界の流れです。中之島界限は、すでにその方向に向



八軒家浜棧橋と遊歩道

かっているように思います。

また、大阪の人は、堂島で行われた世界最初の先物取引のことをあまり意識していないように思います。ハーバード大学のビジネススクールでは、堂島で発祥した米の先物取引を教材として勉強しています。先物取引やその関連産業に従事している人にとって、堂島はまさに聖地なのですね。そうした文化を再発見し、さらに魅力を高めることができるエリアだと思います。

地域のポテンシャルを活かす

佐々木 中之島・天満天神エリアの文化資源や歴史的遺産を活かし、賑わいを創出するためにはどのようなことをすればよいでしょうか。具体的なアイデアをお伺いします。

楠見 中之島の剣先に観覧車をつくるというのはどうでしょうか。ロンドンのテムズ川沿いには大きな観覧車があり、1999年の開業当初はガラガラでしたが、今年行ってみたら、世界各地からの旅行者などで長蛇の列ができていました。剣先からは視界を遮るものがあまりなく、都心の壮大な眺めが楽しめるでしょう。「平成 OSAKA 天の川伝説」を上空から楽しむこともできますね。また、中之島の上を通る阪神高速道路を地中化すれば、新たな地上空間が生まれ、都市機能の高度化や魅力アップにもつながります。荒唐無稽と思われるかもしれませんが、アメリカのボストンやドイツのケルンでは、そうしてまちの魅力を高めました。

藤尾 剣先に疾病退散を願う「昇り龍」を建て、観光集客のシンボルにするというのはどうでしょうか。人々がわざわざ行きたい場所にするには、注目されるシンボルや名所が必要です。例えばシンガポールを観光する人は、まずはマライオンを見に行きますね。たった8mのマライオンですら、

人々の興味を惹き付けているのです。最近、川を行き交うクルーズ船に海外のお客も増えていますが、中之島にはシンボルがないという声も聞きます。剣先の「昇り龍」は、ニューヨークの「自由の女神(93m)」に対抗して、100mぐらいにしようか。

原野 剣先公園は大阪市の所有ですが、地域の人たちが公共空間をもっと活用する方法を考え、アイデアを出すのはとても大事だと思います。天満天神エリアは歴史的にも大阪の中心であり、中之島は水の都・大阪のランドマークでもあります。ここに水を活かしたシンボルはありません。海外にはパリのシテ島をはじめ、中洲のまちとして栄えている事例は多くあります。私も、中之島に関する歴史的な逸話を可視化して、このエリアをいかにチャームングに見せるかを考えてきました。例えば、毎年7月7日に開催する「平成 OSAKA 天の川伝説」では、天満橋からばらぞの橋までの範囲に5万個の「いのり星[®]」を放流します。これを40万個ぐらいに増やし、堂島川や土佐堀川を埋め尽くす。すると、中之島が浮かび上がり、ギネスブックに認定されるような新たな都市景観が演出できますが、いかがでしょうか。

村西 イタリア・ベネチアで運行しているヴァポレット(水上バス)のようなものが中之島にもあればいいですね。ゴンドラのようにコースの決まった遊覧船ではなく、乗船代が高い水上タクシーでもない、手軽な水上の移動手段です。これに乗って対岸のお店に行ったり、島内を散策したり、中之島の水辺で一日中楽しめたら素敵ですね。もちろん自分たちでゴンドラをチャーターして大川に繰り出すのもいいですが、手軽に川に出ていける手段がもっと増えればいいなと思っています。また、川に背を向けているビルがまだまだ多いですが、川も人々が行き交う集客資源だと思って、水辺に顔を向けたまちづくりをすれば、もっと素敵な中之島になると思います。そんな船遊びの楽しめる中之島や八軒家浜の実現が私の夢です。

原野 私たちは普段、陸側から川を眺め、陸を中心に都市化を推進してきました。その結果、護岸が切り立って船が着けられないなど、川側から見た都市景観づくりをしてこなかったように思います。かつては海や川を通して天満宮に参詣することもあったと思いますが、そうした歴史的ルートが都市化によって遮断されてしまいました。私は、中之島や天満天神エリアでは、例えば川から天満宮に参詣するルートをつくるなど、川からの視点に立って、川と陸をもっと連携させることが活性化につながるように思います。

村西 私を含め、旅行をする人の多くは、まずインターネットで旅先の情報を検索します。とくに若い人たちは、インスタグラム(無料の写真共有ソフト)を使って気に入った風景を探し出し、自分もその風景を撮ったり、その中に納まりたいと思います。そして現地に行き、念願の風景をバックに写真を撮って、インスタグラムにアップし、多くの人に見てもらおうのです。先ほどのお話にあった剣先公園の観覧車や昇り龍、平成 OSAKA 天の川伝説といった魅力的な風景もこうして世界中に発信され、多くの旅行者の興味を喚起するでしょう。観光集客という観点で見れば、いかにフォトジェニックなまちをつく



中之島・剣先の観覧車(想像図)(楠見晴重氏提供)



中之島・剣先の「昇り龍」のイメージ(想像図)(藤尾政弘氏提供)

るかということもポイントになります。もし、観覧車や昇り龍の建設、高速道路の地中化などが実現すれば大ニュースになりますから、報道の仕事に携わる者としては、制作段階から密着取材させていただき、大阪から発信したいと思います。

寺井 近ごろは、天神橋筋商店街や西天満などで新たな「町衆」が連携し、まちの活性化に向けた活動に取り組まれています。そうしたこともあって、天神橋筋商店街は全長が2km近くある日本一長い商店街だということも、ずいぶん知られるようになりました。そして全国の商店街関係者が、ここへ視察に来られるそうです。

一方、御堂筋に沿った西天満の老松町は、骨董品店や画廊が軒を連ねる静かなまちです。また、中之島の大阪市中央公会堂から大川沿いに東へ行き、天満橋を過ぎると大阪城や桜の通り抜けで有名な造幣局があります。天満天神地区には、歴史的建築物が今なお現役で使われていたり、大阪の歴史を伝えるさまざまなポイントがあります。こうしたエリアが連携し、地域のレガシーを活用することで、新しく面白い活性化のアイデアも生まれると思います。

佐々木 大阪は昔から「食い倒れのまち」として知られています。それを支えてきたのが良質の井戸水で、江戸時代「大坂四清水*」と称された天満宮の水「天満天神の水」が復活されましたね。

*天満宮の水、千日前の福井の水、道頓堀の秋田屋の水、聚楽町の愛宕の水

寺井 天満天神エリアは、昔からとても良い水が湧くところで、江戸時代には造り酒屋が130数軒もありました。硬度の低い軟水だそうで、昆布出汁をひくには最適な水、こうしたことも大阪の食の美味しさを支えていました。それが地下鉄やJR東西線が通ったことで水脈が切れて残念に思っていたところ、楠見先生にご助言いただいて2014年に天満宮境内で85mほど井戸を掘ってみたら、とても良い水が湧き出しました。

大阪の7月は「祭り月」といわれ、1日の愛染まつりから30日の住吉祭りまで、市内にある約150の神社全てで夏祭りが行われます。また、この時期、大阪・船場では、鱧や蛸、カイワレ、白天などを使った「祭り料理」で客人をもてなす風習がありました。これを夏の祭り時期にアピールしてはどうでしょうか。祭り料理のコンクールをしたり、それをメディアを通じて発信してもらうのです。B級グルメがブームの今、大阪人のプライドにかけて「A級料理」を安く楽しめる機会があってもいいと思います。こうした大阪ならではの食やおいしい水をもっとアピールしていただければと思います。

佐々木 「鳥のように自由に空を飛びたい」という夢から、自転車職人だったライト兄弟は飛行機を創り出しました。はじめに夢ありき。都市には中長期のビジョンが必要です。本日は皆さまのさまざまな夢や思いを伺いました。水の都・大阪、中之島や天満天神地区をさらに魅力あるところにするために、こうした夢を実現・推進するための議論を深めたいと思います。ありがとうございました。

「天神の水」御神水舎(天満宮境内)と「天満天神の水」



平成 OSAKA 天の川伝説 2017

7月7日／大川・天満橋～北浜周辺

主催：おしてるなにわ 共催：関西・大阪21世紀協会

大阪市の中心部を西流する大川は、かつては「天満川」とも呼ばれ、その川面に満天の星を映すようすは、「地上の天の川」のようでした。「天満」の名の由来である「天に星満ちる」川だったので。また、大川右岸にあった「明星池」「七夕池」「星合池」の名は、この辺りが七夕の夜に星辰信仰を行ったことを伝えています。2009年に始まった「平成 OSAKA 天の川伝説」は、LEDを光源とする「いのり星®」によって、その幻想的な景観を再現するものです。そして大阪の夏の風物詩として観光集客につなげるとともに、人々の心に愛と希望の光を灯したいという願いが込められています。9回目となる今年は、大川に5万個のいのり星® が放流され、約6万2,000人がその光景に見入りました。また、関連イベントの「天の川伝説落語会」「天の川クルーズ」「大阪七夕バル」などの関連イベントも好評でした。